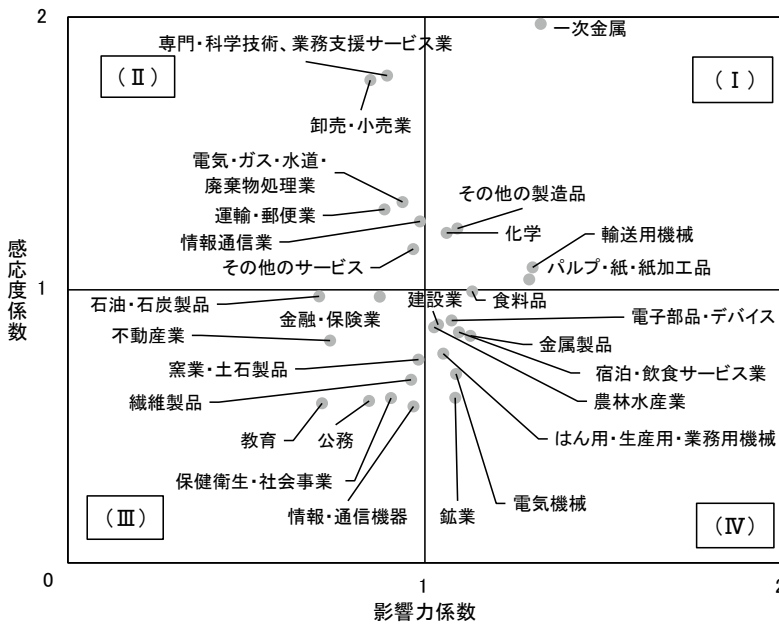


業種別の生産波及効果と感応度

産業連関表は、わが国の経済構造を総体的に明らかにした統計表であり、これを用いて各業種間の相互依存関係を計算することができる。今回は「平成28年SNA産業連関表」(平成23年基準)に基づき、29の業種(産業部門)の生産波及効果と感応度をみることにしたい。

ある業種の最終需要が一単位増加した場合に一国全体に与える生産波及効果(影響力)を相対的に表す「影響力係数」をみると、「一次金属」(製鉄業、その他の鉄鋼業、非鉄金属製造業)が1.325と最も高い値を示している。以下「輸送用機械」(1.302)、「パルプ・紙・紙加工品」(1.292)の順となっている。一方、「石油・石炭製品」は0.704と最も低い。

影響力係数と感応度係数 (平成28年)



(出典) 内閣府「平成28年SNA産業連関表結果の概要」p.6

また、すべての業種の最終需要が一単位ずつ増加した場合に、各業種の産出額に対する相対的な影響を表す「感応度係数」をみると、生産波及効果と同様に「一次金属」が1.975と最も高い値を示している。以下「専門・科学技術、業務支援サービス業」(1.786)、「卸売・小売業」(1.769)の順となっている。一方、「情報・通信機器」は0.573と最も低い。

「影響力係数」を横軸に、「感応度係数」を縦軸にとった左記のグラフをみると、双方ともに1を上回る (I) に位置する5つの業種は一国全体に対する影響力が大きく、他の業種からの影響も受けやすい。(II) に位置する6つの業種は影響力は小さいが、他の業種からの影響を受けやすい。(III) に位置する9つの業種は、影響力も他の業種からの影響も小さい。(IV) に位置する9つの業種は影響力は大きい、他の業種からの影響は小さい。

このようにみると「一次金属」の影響力と感応度が際立っている。「一次金属」の生産動向は、わが国経済の動きをみるうえで重要な指標といえよう。

(商工総合研究所調査研究室長 筒井 徹)